

2014 年 10 月 25 日(土)より
シネ・windにて上映決定！
※近日前売開始！

「あいときぼうのまち」に寄せられたコメント

田原総一郎（ジャーナリスト）

ドキュメンタリーでは描けない菅乃監督の憤りが痛いほど感じ取れる。

宇都宮健児（弁護士、元日本弁護士連合会会長）

この映画を見て「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」という、ドイツのヴァイツゼッカー大統領の有名な演説を思い出した。「私たちは、先の戦争や国の原子力政策、福島原発事故で傷つき斃れていった人々のことを心に刻まねばならない。再び過ちを繰り返さないために」このことを改めて強く感じさせてくれた映画である。

福島みずほ（参議院議員 社会民主党）

戦争中のウラン探掘、原発反対派の気持ち、3.11 前と後。福島県の 4 世代にわたる家族の必死の物語。女たちの遅さと切なさ感激。お父さんが反原発のために苦勞する 10 代の愛子ちゃんと夏樹陽子さん演じる 61 歳の愛子さん。いずれも素敵だ。愛と希望の物語。原発と家族を描ききった素晴らしい映画！

蓮池 透（元東電社員）

作品で描かれる 70 年には及ばないが私も福島県双葉町で 6 年間暮らした。当時は反対運動もなく平穏でどかな町での平和な家族生活があった。

3.11 で状況は一変、その町は廃墟と化した。おそらく住民が戻ることは不可能だろう。

しかし、まるでそんなことはなかったかのように、東電と政府は原発再稼働と海外輸出にまっしぐらだ。故郷を奪われた人たちの気持ちをみんな忘れてはいないか。この映画を観て、「あいときぼうのまち」(原子力未来の明るいエネルギー)が今どうなっているのか考えよう。

タブーに真っ向から挑戦する画期的な作品。必見！

上野千鶴子（社会学者・認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク理事長）

哭いた。「第二の敗戦」を迎えてしまったわたしたちの無念と悲嘆、そしてもってゆきどころのない悔いと怒り。フクシマと共に生きよ、と告げるこの映画に、カタルシスはない。

室井佑月（作家）

原発問題だけでなく、日本社会にはびこるいじめの構造が浮き彫りになっている衝撃的な作品だ。この国はどうか、この国をどうするのか。とても考えさせられる。

小山内美江子（脚本家）

すべてを奪い去った海辺で、生き残った者は 70 年の過去から打ち寄せる潮騒の中に、無念と愛の言葉を聴いた。

荒川強啓（フリーアナウンサー）

原発は地元には雇用と豊かさを与えて来たと思っていた、3・11 前迄は。

事故から 3 年、町は崩壊し家族はバラバラ。避難先から戻れる見通しも立っていない。過疎、限界集落は翻弄される運命にあるのだろうか。復興、支援、絆…。言葉だけが虚しく響く。この映画は、改めて問い掛けてきた。

「お前に何が出来るのか？」と。

小出裕章（京都大学原子炉実験所助教）

歴史は無数の出来事で彩られる。愚かなこと、辛いこと、個人の力では乗り越えられないこと……。でも、全てのことに意味がある。3・11 の津波も福島第一原子力発電所の事故も事実として起き、続いている。心に刻み続けたい。

旗野秀人（映画『阿賀に生きる』製作発起人）

ドキュメンタリー映画『阿賀に生きる』の佐藤真監督は亡くなる前に「今度は劇映画を撮りたい」と言っていた。ひょっとするとこの映画のことではなかったか。私には水俣病事件史が重なって見えた。

寺脇 研（映画評論家）

戦争のできる国になろうとしている日本に「あいときぼう」はあるのか？

そして、この映画の中にわれわれは「あいときぼう」を発見できるか？



水野誠一（一般社団法人 Think the Earth 理事長／元 西武百貨店社長）

この映画に幾度となく登場する「原子力 未来の明るいエネルギー」という 60 年代に東電が募集・採用した標語が実に印象的だ。観る我々に本当に明るい未来だったのかを問いかけてくる。ジグソーパズルのように次第に繋がっていく三つの時代を生きた四世代それぞれのエピソードから、その一家にどれだけの苦悩や悲しみの連鎖があったのかを浮かび上がらせる手法も見事だ。

樋口健二（フォト・ジャーナリスト）

ヒューマニティーに富んだ映像表現がこの映画を一層際立てている。四世代、70 年に及ぶ一家の物語であるが原発の本質を鋭く描写する。日本人が忘れてならない現実だけにこの映画の歴史的意義を強く感じる。

米田哲平（函館港イルミネーション映画祭実行委員長）

2013 年、映画祭の番組決定後、「戦争と一人の女」の監督、井上淳一さんから自分が脚本を担当した映画が上がったので、上映できないかとの打診があり DVD が送られてきた。原発を背後に据えた 4 代にわたる家族の葛藤に胸が打たれた。すぐに追加で上映を決めた。ワールド・プレミアが決まった瞬間だった。

横路孝弘（衆議院議員 民主党）

国の意志として遂行される戦争や原発。その時代に生きる者に、「愛」や「希望」や「明るい未来」はどこにあるのだろう。探し求め、もがき苦しむ人々。映画の熱い力が、怒りの愛となり共鳴する。ホルンの音色が胸に沁みる。

寺田典城（参議院議員）

昨夏、福島第一原発を視察した。途中には耕作できず荒れた農地、人影の消えた街があった。東京に戻れば街は明るく、人々の様子は 3.11 が無かったかのようにだが、福島は終わっていない。一度あった事は二度ある事を忘れてはならない。

相沢一正（東海村議会議員）

ウラン原鉱探掘現場での旧制中学学徒の勤労働員、そして原爆から原発、「原子力明るい未来のエネルギー」から 3.11。戦時下から現代まで 4 世代にわたる挿話の進行が目まぐるしく転換しつつ現れる。時代を貫いているあるものが浮かび上がってくるという構成だ。3.11 を歴史の深みと人の営みのなかから描き上げた、味わい深い映画だ。

吉原 毅（城南信用金庫理事長）

ウランや原発や地震がばらばらにする前から、家族の心は荒んでいた。傷を舐め合うように愛し、むしろ亀裂は深まる。そのすれ違いをつなぐのも、しかし人である。戦争や原発事故の引き金はすべて人間。だからこそ、人は人にしか救い得ない。どんなに荒廃した闇の中からでも、人は希望という光をめざしてひとつになれる。

（順不同・敬称略）次号に続く...

「あいときぼうのまち」新潟通信 創刊号 発行：「あいときぼうのまち」新潟応援団 発行日：核時代 69(2014)年 7 月 10 日